

[論 文]

## 東北帝国大学附属図書館の蔵書形成

—特殊文庫の成立をめぐる—

おがわ ともゆき

小川 知幸

(東北大学)

### 抄録

東北帝国大学附属図書館初期の蔵書形成には、1922年(大正11)に現在の法・文・経済学部の前身である法文学部が設置されたことと、その初代教授たちが留学中に7名のドイツ人研究者の旧蔵書の買い付けに尽力したことが重要であり、それらの受入れが今日まで続く特殊文庫の基礎となった。それは当時の潤沢な図書予算と大戦間期ドイツのハイパーインフレーションに動機づけられていた。

しかしインフレーションは1922年から1924年までの2年足らずで収束し、また旧蔵書は立て替え金によって購入されたため、その請求額は当初の予算をはるかにこえて巨額の負債を生んだ。償却のために特殊文庫・一般蔵書を含めて約1,700冊の図書が売却され、特殊文庫の一部は一般蔵書のなかに混排された。とはいえ遺文庫を顕彰しながら徹底して蔵書整理をおこなったことで価値ある図書が残され、特殊文庫と一般蔵書の共存が可能になった。

### 1. はじめに

東北大学附属図書館の2016年度の蔵書数は400万冊をこえており<sup>1)</sup>、国内の大学図書館としては有数の規模を誇る。これは2016年におこなわれた全国大学図書館ランキングでは第7位に位置づけられている<sup>2)</sup>。第1位の東京大学、第2位の京都大学を除けば、それ以外の大学の蔵書数にそれほど大きな差はないともいえるが、東北大学附属図書館についてはそのような数的な優位というよりも、そこに50をこえる「特殊文庫」を所蔵していることにこそ特徴があるといえよう(文末表1)<sup>3)</sup>。

特殊文庫とは、その旧蔵書の名前を冠して一括して排架されたものであり、個人名がつくことから、運用上は「個人文庫」とも称されている<sup>4)</sup>。

著名なものとしては、漱石文庫、ケーベル文庫などが一例として挙げられるだろう。

東北大学附属図書館は、なぜこのような多数の特殊文庫を作りあげたのだろうか。そのきっかけは、1911年（明治44）に東北帝国大学が創設され、翌年に狩野文庫が購入されたこと、そしてとりわけ、現在の法・文・経済学部の前身である1922年（大正11）の法文学部の設置と、大戦間期ドイツの政治・経済情勢に大きくかかわっていたとされる。よく知られる、賠償金問題に端を発する第一次大戦後のハイパーインフレーションである。その結果として購入された7名のドイツ人学者、すなわち、ゼッケル、チーテルマン、シュタイン、ヴント、シュマルソー、ミュンスターベルク、ヴォルチェンドルフの旧蔵書が特殊文庫として受け入れられ、当時の附属図書館における蔵書の重要な一角をなしたのである<sup>5)</sup>。

なかでもヴント文庫やゼッケル文庫は、それぞれ15,840冊、7,380冊というその規模もさることながら、容易には入手できないさまざまな分野の研究書が多数含まれていたことから、長きにわたって大学の誇りとされてきた。しかしながら上記の特殊文庫には、「第二特殊文庫」としてその名前だけを残し、一般蔵書のなかに混排されてしまったものもある。

筆者は約2年前より、この第二特殊文庫のひとつであるミュンスターベルク文庫を一般蔵書中に搜索し再構成する事業に携わっている<sup>6)</sup>。まだ道半ばであるが、これにより、特殊文庫の購入の経緯や、一部の図書の売却などの事実が新たに判明した。そこで本稿では、この調査の過程で明らかになった東北帝国大学の創設から1933年（昭和8）までの附属図書館の蔵書形成史とその歴史的背景を探りながら、当時の蔵書思想を考察する。また行論では、特殊文庫はなぜ二種類にわかれたのか、そしてドイツのインフレーションは、それらの蔵書の購入にとってははたして本当の意味で貢献したのだろうか、という点についても明らかにしたい。

## 2. 蔵書数の推移と戦間期ドイツの「危機の時代」

### 2.1. 蔵書数の推移

東北帝国大学は1911年（明治44）に理科大学として発足した。初年度に購入した図書は、和漢・洋書それぞれ200冊前後であったが、翌年の1912年に和漢書7万3千冊余りの狩野文庫が購入された（第一次受入分）。これは、初代総長の沢柳政太郎が狩野亨吉と親交のあったことか

ら、蔵書を一括して国立の大学に永久に保管することを条件に、当初の査定額 10 万円の 3 分の 1 にも満たない 3 万円で事実上譲り受けたものといわれる。だが、その予算も大学ではなく、仙台の実業家で貴族院議員であった荒井泰治（1861～1927 年）の寄付による「奨学資金」をもちいた<sup>7)</sup>。このように狩野文庫は、大きさも受入れの経緯も異例づくめの大文庫であったが、その後はしかし、和漢・洋書とも各年度数百冊程度のわずかな増加にとどまり、蔵書数は横ばいのままであった。また全体として狩野文庫のウェイトが大きすぎるために、和漢書への極端な偏重が見られた（表 2・図 1）。1915 年（大正 4）になると医科大学が開設し、さらに 1919 年（大正 8）には工学部が設置されたが、蔵書数の伸びは見られない。そして、この状況がにわかに変化するのが、1922 年（大正 11）から 1926 年（大正 15）までの時期であり、ここでは現在の法・文・経済学部の前身である法文学部の設置と、それにとまなう大量の洋書の購入がおこなわれたことがわかるのである。とくに 1925 年（大正 14）には、約 3 万 2 千冊もの洋書が受け入れられており、それまでの和漢・洋書の通常の比率が初めて逆転する。その後は、和漢・洋書とも恒常的に数千冊以上のオーダーで購入されるようになり、以後は年間 1 万冊前後のペースで蔵書が増加するようになった。このように法文学部の設置は、附属図書館の蔵書の形成にとって大きなインパクトをもつものであったことが明らかである。

表 2: 東北帝国大学附属図書館蔵書数の推移(分館, 学部および研究所図書室分を除く)<sup>8)</sup>

西暦	元号	和漢書	洋書	和漢洋合計	総数(冊)	備考
1911	明治44	177	200	377	377	理科大学開設
1912	明治45	72,579	587	73,166	73,543	狩野文庫購入
1913	大正2	1,380	385	1,765	75,308	
1914	大正3	528	236	764	76,072	
1915	大正4	420	223	643	76,715	医科大学開設 医科分館設置
1916	大正5	234	90	324	77,039	
1917	大正6	237	139	376	77,415	
1918	大正7	294	395	689	78,104	
1919	大正8	117	145	262	78,366	工学部設置
1920	大正9	122	298	420	78,786	

1921	大正10	474	510	984	79,770	
1922	大正11	4,546	1,143	5,689	85,459	法学部設置
1923	大正12	6,701	2,678	9,379	94,838	
1924	大正13	17,554	8,558	26,112	120,950	書庫, 図書館竣工
1925	大正14	6,519	31,721	38,240	159,190	シュマルソー, ヴォ ルチェンドルフ文庫 購入, シュタイン, ヴント文庫受贈
1926	大正15	3,499	8,283	11,782	170,972	ミュンスターベル ク, ゼッケル文庫購 入, チーテルマン文 庫購入および受贈
1927	昭和2	6,092	5,925	12,017	182,989	
1928	昭和3	2,978	4,927	7,905	190,894	
1929	昭和4	6,444	4,450	10,894	201,788	西藏大蔵經受贈
1930	昭和5	3,860	4,385	8,245	210,033	
1931	昭和6	7,414	7,090	14,504	224,537	
1932	昭和7	7,785	4,114	11,899	236,436	
1933	昭和8	6,245	3,343	9,588	246,024	

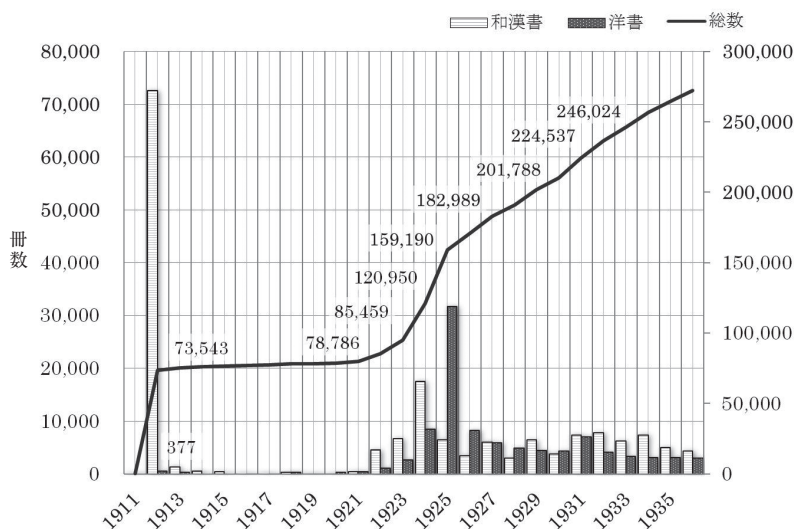


図1：東北帝国大学附属図書館蔵書数の推移（同上）

## 2. 2. ドイツ・マルクの暴落

さて、それでは、その蔵書の、とくに洋書の増加に寄与したのは何であったかといえ、むろんそれは上記のドイツ人学者たちの旧蔵書が購入されたことであった。統計上は 1925 年と 1926 年に集約されているが、それにしても冊数の合計が少なすぎることと、後述するように、一例としてヴント文庫は 1922 年に積み出され同年日本に到着していることなどから、受入れ登録はじっさいにはその前後の年度にも分散しているようにおもわれる。

なぜこのような大量の洋書の購入が可能であったのか。それは、第一次世界大戦後から第二次世界大戦までの戦間期におけるドイツのハイパーインフレーションによるところが大きいとされる。1914 年にドイツのロシアに対する宣戦布告により勃発した第一次世界大戦（当時のドイツでは「世界戦争」Weltkrieg と称した）は<sup>9)</sup>、1918 年に停戦条約、そして翌 1919 年にヴェルサイユ条約によって終結し、これと同時に多額の賠償金問題が発生した。1921 年に 1,320 億金マルクという債務総額が決定したが、これはドイツの国民総生産（GNP）の約 20 年分に相当する、まさに天文学的な数字の賠償額であったという。そのため、1922 年にドイツ政府はそれまでの兌換紙幣に代えて不換紙幣の発行に踏み切ったことで、戦時インフレにあってそれまでもすでに通貨価値が低下していたマルクのインフレーションが、以後急加速することになった。

当時の写真には、大八車で大量の札束を運ぶ人物や、紙幣で作った風を揚げて遊ぶ子どもたち、また、壁紙がわりに紙幣を壁に貼るようすなどが記録されている。金兌換紙幣であった金マルク（Goldmark）に対して、民間企業にも委託して増刷させたという不換紙幣のマルクは、紙切れにも等しいものになった。紙くず同然とはいわないまでも、文字通り紙より安いものになったのである。

それでは、具体的に日本円とマルクの為替レートはどのように推移したのだろうか。日本円に対するドイツ・マルクの価値は、1920 年 8 月までは 1 円あたり約 2 マルクであったのが、同年 9 月からは約 30 マルクに下落し、1922 年 3 月には約 125 マルク、1923 年 1 月には最高で 1 万マルクをこえるようになった。図 2 にしめたように、1923 年 8 月には 301 万マルク、平均でも 145 万 2,500 マルクになった。したがって、従

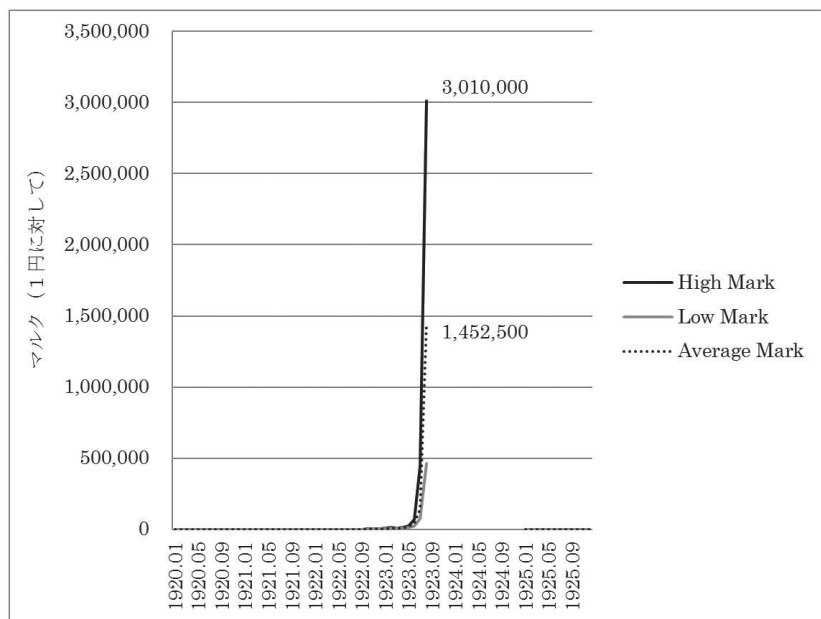


図2：マルク為替レートの推移（1920～1925年）<sup>10)</sup>

前の価値のおよそ150万分の1にまで下落したのである。ただし、日本銀行金融研究所のデータには、残念ながらその後1924年12月まで約1年半の数字が欠落しているので、同時期のドル＝マルクの為替レート（表3）から円マルクのレートを推測してみたい。1923年8月の1ドルは460万マルクであり、これが1923年11月には4兆2,000億マルクまで下落している。また、同研究所のデータによれば、この時期、1円は約40から50ドルで推移しているため、円マルクのデータのない1923年9月から1924年12月まで、ドルは円マルクの平均値の約3倍と仮定すると、1億マルクは3億円、250億マルクは750億円、4兆2,000億マルクは12兆6,000億円となる。1円あたり約2マルクであった元レートと比較すれば、1923年11月の段階でマルクに対する1円の価値は、最大で従来の6兆倍まで高まっていたといえるだろう。

表3：ドル＝マルク為替レートの推移（1919～1923年）<sup>11)</sup>

日付	1ドルあたりのレート
1919年 1月	8.9マルク
1921年 6月	65.0マルク
1922年 1月	192.0マルク
1922年11月	7000マルク
1923年 1月	5万マルク
1923年 6月	10万マルク
1923年 7月	35万マルク
1923年 8月	460万マルク
1923年 9月	1億マルク
1923年10月	250億マルク
1923年11月	4兆2000億マルク

しかし、1923年11月には、1兆マルクを1マルクとする Rentenmark（Rentenmark）の発行と事実上のデノミネーションにより、このようなインフレーションは急速に収束することになった。これにより、マルクの価値は以前の水準まで回復する。翌1924年8月には Rentenmark と同価値の Reichsmark（Reichsmark）を発行し、ドイツは金本位制に復帰することになった。したがって、戦後ドイツのハイパーインフレーションとは、1922年（大正11）半ばから1924年（大正13）初めまでのわずか2年足らずの出来事だったのである。

とはいえ、その間に通貨であるマルクを紙切れ以下にして預貯金を吹き飛ばし、すべてのドイツ人の生活を、貧しき者であれ富める者であれ、根幹から破壊し尽くすには十分すぎるほどであった<sup>12)</sup>。表4の主食であるパンの価格の推移からは、その市民生活が危機的な状況にあったことが容易に看取できる。

表4：ドイツにおけるパン 1kg の価格の推移<sup>13)</sup>

日付	価格
1919年12月	0.8マルク
1920年12月	2.37マルク
1921年12月	3.9マルク
1922年12月	163マルク
1923年1月	250マルク
1923年4月	474マルク
1923年7月	3,465マルク
1923年8月	6万9,000マルク
1923年9月	151万2,000マルク
1923年10月	17億4,300万マルク
1923年11月	2,010億マルク
1923年12月	3,999億マルク
1924年1月	0.3マルク

### 2. 3. 在外研究と図書費

いっぽう 1921 年（大正 10）1 月から，東北帝国大学の法文学部初代教授らは，在外研究のため相次いで渡欧し，20 名以上が代わるがわるドイツやその周辺国に滞在していた<sup>14)</sup>。判明している限りで，大正 10 年に渡欧したのは，小山鞆絵（哲学），大類伸（西洋史），和田佐一郎（経済），勝本正晃（民法），小町谷操三（商法），また，大正 11 年には小林淳男（英文学），村岡典嗣（文化史），河村又介（国家論），福井利吉郎（文化史），土居光知（英文学），宇野弘藏（経済），鈴木宗忠（宗教），小宮豊隆（ドイツ文学），阿部次郎（美学），さらに大正 12 年には中川善之助（民法），堀経夫（経済），中村善太郎（西洋史）が渡欧し，その他にも，石田文次郎（民法），千葉胤成（心理学），栗生武夫（ローマ法）らが留学中であった。法文学部の創立委員長であり初代学部長となった佐藤丑次郎も，その間に洋上の人となった。

端的に言えば，このとき日本は戦勝国であり，折からのインフレーション



ンもあってその留學生活はとくに恵まれていた。「在外諸教授の生活は百万長者の觀あり、文部省から届けられる毎月の在外研究費はドイツ紙幣にして持ちきれものではなく、紙幣運搬を主たる目的として車に乗らざるをえなかった」という<sup>15)</sup>。また、法文学部を運営するにあたっては図書館を充実させる必要性が強く意識され、予算として「図書費約48万円が計上」されていたといわれる<sup>16)</sup>。さらに、「新設の法文学部のため図書購入費は一人あたり2万円くらいが見込まれた」との証言もある<sup>17)</sup>。表5にみるように、1925年(大正14)当時の2万円は大学教授の年俸6,700円の約3倍にあたる金額であった。いわゆる消費者物価の計算は、インフレーションや現在の給与・賃金水準との釣り合いから困難がともなうが、当時の1万円は米価換算をもとにすれば現在の物価水準ではおよそ1千万円となり、給与をもとにすれば5千万円程度になるだろう<sup>18)</sup>。

表5：役職と年俸

役職	年俸
総理大臣	1万2,000円
大臣	8,000円
大学教授	(最大) 6,700円
専任講師	(最大) 1,500円
雇員	240円

また、これを当時の東北帝国大学の予算全体から見ると、「図書費約48万円」が1922年(大正11)における予算総額280万円に占める割合は、表6に見られるように(総額＝経常費＋臨時費)で構成されるので、総額から経常費170万円を引いた臨時費110万円のうちに含まれていたはずである。したがって、臨時費の約半分が図書費として充当されていたといえる。ところで、予算総額は1913年(大正2)の83万円から1922年までに3倍以上増加しているが、これは表6に物価指数を付したことからわかるように、日本でも大戦特需等によるインフレーションが起こっていたためであった。1917年(大正6)には、和田邦坊による「成金栄華時代」という著名な風刺画が描かれ、米の買い占めと米価の高騰により、翌1918年には富山県を発端とする米騒動が全国的に拡大した

ことが知られている。ともあれ、1922年の臨時費は他の年度とくらべてもひととき大きく、法文学部設置のために潤沢な予算が確保されていたとみることができよう。

表6：東北帝国大学の予算額（1913～1924年）<sup>19)</sup>

年度	総額	経常費	物価指数
1913（大正2）	83万円	71万円	100
1917（大正6）	137万円		
1918（大正7）	120万円	70万円	216
1919（大正8）	185万円	83万円	
1920（大正9）	230万円	130万円	256
1921（大正10）	210万円	150万円	
1922（大正11）	280万円	170万円	
1923（大正12）	275万円	200万円	199
1924（大正13）	300万円	225万円	211

このように、我が国は第一次世界大戦の戦勝国であり、大戦景気による好況の余波と物価の上昇を背景として、経済的に有利な立場にあった。その上さらにこの時期の東北帝国大学における新学部設置により、気概に満ちた初代法文学部教授らは、在外研究中のドイツにおいて<sup>20)</sup>、1922年に始まったドイツ・マルクのハイパーインフレーションに補助され、次々と価値ある旧蔵書を獲得するのに成功したのであった<sup>21)</sup>。ドイツ人は、生活のために財産を手放さざるをえなかったのだろう。7つの文庫の旧蔵者が、1名を除き、1920年から1924年までに逝去していることも注目される（表1参照）。つまり、それらのほとんどは遺族によって換金されたのであった。とはいうものの、ドイツ人にとって日本円は安定した外貨であり、その取得は生活防衛のための有効な手段のひとつであったとも推測される。すでにドイツのおもな企業はドル建て決算に切り替えており、マルクの暴落から一定の距離を置いていたといわれる。したがって、ひたすら市民のみがマルクの危機に晒されていたのであるが、日本人によるこのような旧蔵書の購入は、その意味で日独間に、ある種

の互惠関係を構築していたといえば、言い過ぎであろうか。

### 3. 特殊文庫の成立とその後

#### 3.1. 特殊文庫の成立

さて、蔵書購入の背景は以上であるが、購入後の状況についても探ってみたい。1922年（大正11）8月25日付の河北新報には、「独米の邪魔よけにランセン文庫で来たる 世界的珍本ヴンド文庫『もう積み出したと入電がある』と佐藤法文学部長喜ぶ」という見出しの記事が掲載されている。当時の歓迎的な雰囲気をよく伝えているので、少し長いが以下に引用する<sup>22)</sup>。

「東北大学で購入契約をしたヴンド文庫について、独逸学界では斯様な至宝は国外に持ち出されることを遺憾として、どうにかして売り出しを引き止めようとする輿論が高まるとともに、陰には金に飽いている米国が茶々を入れているので、交渉は頗る複雑した関係になってきたとの情報がある。右を質して法文学部長佐藤丑次郎博士を訪えば、『いや、複雑な関係になっているのは事実であるがライブチッヒの書店からは「送金は受け取った、本を積み出した」という電報が着いているから、遅くも10月半ばまでには到着するはずである。実際、1万5千余の図書ならびに研究論文、雑誌類は、ほとんどまとと獲られない珍書で（中略）ヴンド博士が生前精選して蒐めたもので（中略）、それらはいずれも博士の専攻であった医学から脳作用の研究、それから心理学、哲学、民族心理学というふうに研究の経過が明瞭するようにあるいは欄外に註があり批評が書き込まれてあるというので（中略）大学者の面影を偲ぶに足るものであるから独逸学界に輿論の惹起されるのも無理がなく同情に堪えないが、我が学界にとってはあるいは掘り出し物というべきである』（中略）と大ニコニコでいた」。

佐藤丑次郎（1877～1940年）は京都帝国大学教授であり、1921年（大正10）にはまだ東北帝国大学法文学部の創設委員長であったが、ヴィルヘルム・ヴントのもとに留学していた千葉胤成からの打電により、ヴントの死と蔵書の売り立てを知ると、ただちに仙台入りしてドイツやアメリカの大学からの購入希望を一蹴するだけの手付け金を齋藤報恩会に工

面させ<sup>23)</sup>、いったんはアメリカに行くはずであったものを、ついに東北帝国大学への譲渡に応じさせた、という<sup>24)</sup>。上記の記事は、購入後も続くアメリカ等による妨害工作のためにヴントではなくランセンとの偽名で文庫を輸出し、それはまもなく我が国に到着するだろうとの佐藤の飲みの会見を伝えたものであるが、大学人のみならず、世間一般からも注目され待望され、あたかも凱旋のような扱いを受けていることが印象的である。

また、同記事では、ヴントの旧蔵書は一部が積み出され、残りは翌年の3月4月に到着の予定だといわれているので、二分割して搬出されたようでもある。偽名を使おうが分割されていようが、中身はヴントの文庫なのだから、ヴント文庫と呼ばれることになる、とも断言されている。ここからすでに、旧蔵書はヴントの遺文庫として、一括して管理する意識が見てとれるだろう。蔵書のなかの批評等の書き込みに価値をおいていることも重要である。「特殊文庫」の構想が芽生えていたといえる。

さらに、こうした事情はゼッケル文庫でもまったく同じであったようである。ヴント文庫のように、当時の国内の新聞記事に取りあげられたかどうかは不明だが、旧蔵書の海外流出への抵抗は、ひとかたならぬものがあつたらしい。ある証言では、「生前（エミール・ゼッケル教授は）本文庫を一つの誇りとして、死後はこれをドイツの国立図書館に売るか、もしドイツの窮乏のため買い上げられないときは英国ではケンブリッジ、オックスフォード、米国ならばハーバード、エール等の世界一流の大学に売れと夫人に遺囑した」という。ところが、「本文庫が日本に売られるということがひとたび（ドイツの）新聞紙に報道せられると」「海外に売却されることに反対しさまざまな困難を伴った」が、「故教授に師事した栗生（武夫）教授の尽力や遺言執行人であった（テオドル・）キップ教授の口添えもあって夫人もついに本学に譲ることを納得するにいたった」とされている<sup>25)</sup>。文庫は1924年（大正13）に購入され、1927年（昭和2）から翌年にかけて日本に到着した（この点で、表1・表2の公表された統計には、事実とことなる微妙な年度のズレがあることに注意されたい）。代金は1万2,000円。これについては栗生武夫と石田文次郎の研究費補助として、同じく齋藤報恩会が援助したとされている<sup>26)</sup>。

ゼッケル文庫には、法文学部初代教授の勝本正晃がデザインしたという蔵書票が7,380冊の蔵書のすべてに貼付された。これにはローマ法の

すぐれた文庫を意味するものとして、ローマ建国神話の双子の兄弟であり狼に育てられたというロムルスとレムスの姿と、月桂樹が描かれている（図3）。このような蔵書票の貼付は、他にはチーテルマン文庫、シュタイン文庫にも見られる。これらは、ゼッケル、またチーテルマン、シュタインの遺文庫であることを記念する符牒であったといえよう。あるいは、法文学部に始めて受け入れられた、法学分野の大文庫であったことが、こうした特別な蔵書票製作の動機となったのかもしれない。



図3：ゼッケル文庫の蔵書票

かくして、ヴァント、ゼッケル、シュタイン、チーテルマン、シュマルソー、ミュンスターベルク、ヴォルチェンドルフの7つの文庫が陸続として東北帝国大学に到着し<sup>27)</sup>、さしあたっては図書館のたてものよりも先に竣工していた書庫へと収められた。しかし、膨大な量の図書を整理することは想像以上の難事であり、「多くは箱詰めのまま山積みされて、研究や講義のために利用することができないと教官たちからの不満も出てくるようになった」らしい<sup>28)</sup>。その整理作業には1929年（昭和4）までかかった、とされているが<sup>29)</sup>、すべての図書資料の登録を完了するには、なお

も長い時間を要したようである<sup>30)</sup>。

また、ゼッケル、シュタイン、チーテルマンの各文庫については、謄写版刷りの冊子体目録が残されており<sup>31)</sup>、それによれば、蔵書は①単行本および定期刊行物、②抜き刷りなどの小冊子<sup>32)</sup>、③一般蔵書に編入する定期刊行物と、3つに区分して整理されたことがわかる。これらの目録は①および③を収録しているので、おそらく単行本と定期刊行物は先行して整理され、抜き刷りなどの整理は後回しにされたのだろう。定期刊行物の一部は、一般蔵書のなかに混排されたようにみえるが、その選

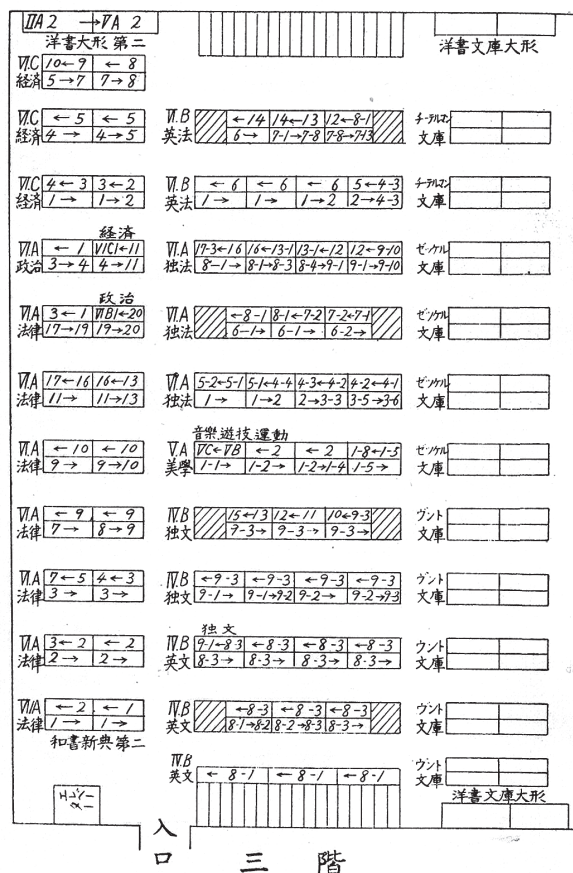


図4：当時の排架図（右列に特殊文庫がみえる）



別の基準は明らかでない。推測するに、複数の文庫に同一の定期刊行物が重複していた場合などに、それらをあつめて一揃いにしたのではないだろうか。いずれにしても、そうして一般蔵書に編入した場合も、目録上ではあくまでも当該文庫中の蔵書として捉えていたのである。

1926年（大正15）になって、ようやく附属図書館の閲覧室が竣工し、いよいよ図書館が機能しはじめた。後年刊行された図書館便覧の排架図には、それらの文庫のいくつかが、書庫の2階と3階に、一般蔵書とは別立てにして一括排架されていることがしめされている（図4・図5）。ここに、名実ともに特殊文庫が成立したのである。



図5：東北帝国大学附属図書館 左が書庫（東北大学史料館所蔵資料）

### 3. 2. 巨額の負債

ところで、話を閲覧室竣工前に戻せば、1924年（大正13）7月に、初代附属図書館長であった林鶴一が辞任し、代わって法文学部中国哲学科教授の武内義雄（1886～1966年）が第二代館長に就任した。小川正孝総長からの直々の要請であり、武内は、「東北大学に來任してからわずか1年くらいしかたっていないが、法文圖書の整理の捗らぬのは学部同僚

の悩みであった。もし自分が犠牲になって（中略）図書の整理を促進することができたなら、それは大学のためにも学部のためにも悪いことであるまい」と自問自答し、これを引き受けたという。

しかし問題はここからであった。武内が「支払いに取りかかって調査すると、すべての予算を使い尽くしてなお20余万の負債を残すことが判明した。（中略）そこで学部長とも相談して、海外留学中の諸教授に打電して図書購入の中止を請い、返品のみく部分はいちおう本屋に引き取らせ、なお一部分は安部能成君の尽力で京城（帝国）大学に買ってもらい、また、齋藤財団（齋藤報恩会）の援助を乞うて負債の償却に全力を注いだ。それは容易の業ではなかった。もし、さらに一年も遅れたら、始末のつかない状態になったろう」<sup>33)</sup>。

つまり、潤沢にみえた予算の上限をはるかにこえた図書の購入がおこなわれていたのであった。20数万円といえば、前述の「図書費約48万円」のおよそ半分に相当する。5割増しの予算オーバーである。ただし、この叙述は、武内の回想であるため、正確にどの時点での負債であったかは不明である。単年度なのか、あるいは積算なのか。ここで問題にしている7つの文庫は、すべて1922年から1924年春頃までには売りに出されているので、これらの代金として、おそらくそれまでの積算であったとすれば、じつに数年間にわたる図書購入費を使い果たして、さらにこれだけの負債を残したといわざるをえない。

表3・表4にみられるように、上記の時期がドイツのインフレーションが急加速した時機とほとんど重なることに注意したい。しかし日本円は、為替レートにより十二分に有利な立場にあったはずである。であれば、なぜ、東北帝国大学には巨額の負債が生み出されたのであろうか。

## 4. 負債と蔵書の整理

### 4.1. 立て替え金による購入と支払い

近年の調査により、1926年（大正15）4月7日付で三菱商事株式会社から栗生武夫に宛てられた「カント書店払い御立替金にかかる件」という文書が新たに発見された（図6）。その書面にはつぎのようにある。

「貴殿御滞独中ベルリンにおいて大正13年ゼッケル文庫ご購入のさい弊社ベルリン支店において御立て替え申し上げ候書籍代金は



第1回払い 金 300 マルク也  
第2回払い 金 3 万マルク也  
第3回払い 金 1,500 マルク也

合計金 3 万 1,800 マルクのところ、かねて弊社ベルリン支店よりご依頼申し上げおき候通り同支店の誤りにて第2回および第3回払い合計金 3 万 1,500 マルク也（中略）だけ申し上げ、第1回払い金 300 マルク也はお勘定漏らしと相成り居候につき、右金 300 マルク也に対し別紙請求書同封ここに許しご請求申し上げ候あいだお支払い方可なり御取り計らい下されたく右ご依頼まで（後略）。

要するに、三菱商事から栗生への、立て替え金の支払い請求書である。この文書によれば、ゼッケル文庫の購入にあたり三菱商事は、これを販売したドイツのカント書店に対して<sup>34)</sup>、合計で3万 1,800 マルクを立て替えていたことになる。その全額についての請求書がこれであり、以前の請求には第1回支払いの 300 マルクを計上していなかったため、今回はそれを併せて請求する、という。その根拠として同文書には、栗生武夫からの依頼状の写しが添付されている。それはつぎのようなものであった。

「1. 金 3 万マーク 但しゼッケル文庫の代金とす。右ゼッケル教授未亡人の代理人たるカント書店にお渡し下されたく候。独貨にてお支払い下されたく候。1924 年 6 月 11 日ベルリンにて 東北帝国大学法文学部代理人 栗生武夫（中略）追白（1）右 3 万マークは未亡人に渡すべき文庫代金に候も、ほかに仲介者たるカント書店に対する仲介料および目録調製のために雇い入れしタイピストに対する第2回の支給料は追って計算の上、御立て替えをお願い申すべく候」。

つまり、書店への仲介料および目録を作成したタイピストへの給与が、上記 3 万マルクとは別に発生し、これが最初の請求から漏れた 300 マルクであったようである。

長々と引用したが、この文書からはゼッケル文庫の買い付け当時の具体的な経過を知ることができる。すなわち、ゼッケルの旧蔵書はオークション等で公開されたのではなく、当初からゼッケル夫人の代理であった書店との直接交渉であったと推定されるのである。これが 1924 年 5

月から6月頃にかけて水面下でおこなわれ、この交渉時に、遺言執行人であり夫人に付き添っていたとおもわれる先述のテオドル・キップ(Theodor Kipp)教授の口添えなどがあったのだろう。その後交渉がまとまり、いよいよ売却が決定すると、アルバイトを雇って目録が作成された。これも、購入者負担という条件だったのだろう。そうこうするうちに文庫買い付けの情報が外部に漏れ、現地の新聞沙汰になったというわけである。ちなみに、エミール・ゼッケルは同年4月26日に逝去したので<sup>35)</sup>、売り立てはその直後に開始されたことがわかる。また、第3回払いの1,500マルクは、輸送のための箱詰めなどの荷造り代であったと推測される<sup>36)</sup>。

三菱商事株式會社		會機 付六
東京市麹町區八重町一丁目一〇番地		一〇 號
拜啓 益々御清榮ノ段奉賀候陳者貴股御滯獨中於伯林大正十三年セツケ	カント書店拂御立替金ニ係ル件	東北帝國大學法文學部
ル文庫御購入ノ際於弊社伯林支店御立替申上候書籍代金ハ		栗生武夫 殿
第一回拂 金參百馬克也		
第二回拂 金參萬馬克也		
第三回拂 金壹千五百馬克也		
合計金參萬壹千八百馬克也ノ處兼ネテ弊社伯林支店ヨリ御依頼申上置		
候通り全支店ノ誤リニテ第二回及第三回拂合計金參萬壹千五百馬克也		
(大正十四年壹月七日當方發送請求書金貳萬四千八百八拾八圓參拾七		
錢也及全書添付伯林送狀第四壹號御參照)ダケ御請求申上御壹回		

大正十五年四月七日

三菱商事株式會社會計部

図6：請求書「カント書店払い御立替金に係る件」

こうして、ゼッケル旧蔵書購入のじっさいの経緯としては、死後直ちに夫人および書店との交渉がまとまり、その後になって、日本への売却が発覚し世間を騒がせることになったのであった。遺族側の切迫した経済事情が斟酌されるほか、栗生の驚くほど迅速な行動と決断にも興味は尽きないが、いずれにせよ、購入から約2年後の1926年（大正15）4月にいたるまで、東北帝国大学からゼッケル文庫の代金はいっさい支払われておらず、日本の商社（三菱商事）がこれを立て替えていたのである。この事実はある意味で衝撃的である。おそらく武内義雄が館長に就任して最初に見たのがこの巨額の請求書であっただろう。しかもゼッケルの旧蔵書は、早くても1927年（昭和2）に日本に到着したというので、このときはまだヨーロッパの港から積み出されてもいなかったのである。武内がそれ以上の図書の購入を中止するよう急いで打電した理由も十分に首肯される。

さらに別の文書を参照したい。これもまた新たに発見されたものであるが、「三菱商事株式会社宛て請求書提出方進達の件」と題された手書きの上申書草案である。上記請求書から約半年後の1926年9月22日の日付があり、そこにはつぎのように記述されている。

「記 栗生教授委託ポートランド号積来ゼッケル文庫  
金2万4千888円37銭也の内 内入金1,800円也  
追伸 利子は全額支払いのさい計算いたすべく今回以後は残額2万3千88円37銭に対し利子計算のこと、ご承知下されたく候」

進達というのは上級官庁への上申の取り次ぎのことであり、この場合は三菱商事からの請求書に対する回答如何を文部省に照会するためのものであったと考えられる。

この文書からは、日本円に換算されたゼッケル文庫の代金が初めて判明する。それは2万4千888円37銭であり、約2万5千円であった。立て替えにより発生したと推定される利子は含まないようなので、じっさいにはこれより大きく膨らんでいたはずであるが、その金額は不明である。しかし、この時点でさしあたり支払うことのできた金額は、そのうちのわずか1,800円のみであった。ゼッケル文庫は齋藤報恩会の1万2,000円の援助により購入された、という叙上の記述は、あくまで公式

の援助分の金額であって、実のところはその倍額以上を支払わねばならなかったのである。

また、請求金額の3万1,800マルクと日本円での支払い額を比較すると、その円マルクの比率は1円あたり約1.28マルクであり、単純にみれば、1920年以前の1円あたり約2マルクの水準よりも下落している。したがって、マルクに対する円の高騰は、文庫の購入金額において実質的に何の影響もあたえていなかったことがわかる。遅くとも、レンテンマルクの発行から1924年8月のライヒスマルク発行までの期間であれば、日本円は依然として有利な為替レートにあったはずであるが、しかしそれまでに支払いはおこなわれていなかった。立て替え払いにより購入から支払いまでの期間が長引いたことで、東北帝国大学はドイツに対してではなく、日本の商社に対して大きな債務を負うことになってしまった、といえるだろう。

このゼッケル文庫の支払いを含めて、その約10倍に相当する20数万円もの支払いは当時の附属図書館にはきわめて困難なものであった。窮余の策として、財団による購入と大学への寄贈という案が急遽浮上したに違いない。すなわち、東北帝国大学の財源不足の当面の穴を埋めたのが、齋藤報恩会による「研究費補助」だったのである。

#### 4.2. 蔵書の売却

さて、このように負債の一部を肩代わりさせたとはいえ、その償却にはまだ程遠かったであろう。それでは、差額の代金はいったいどこから捻出されたのだろうか。

「重複本売却並代金処理原議」という一連の文書が発見されている(図7)。これは全部で27通を数えるが、それぞれの文書は、「不要図書売却の件」「重複図書売却の件」または「重複不要図書売却の件」と題されており、その表現は3種類あるが、いずれも、すでに購入された図書のうち、複本のある場合に1冊を残して他を売却しようとしたものと解される。それらを精査すると、1926年7月10日から1932年(昭和7)3月4日にかけて、合計1,695点の図書が個人あるいは団体に売却されていることがわかった(表7)。これらの文書は図書を点数で表記しているので、その具体的な冊数は不明だが、場合によっては1点につき数冊からなるような図書もあっただろう。

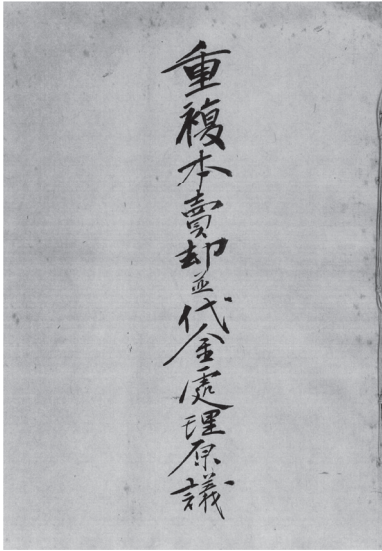


図7：重複本売却並代金処理原議表紙

売却の対象となったのは、児島喜久雄、中川善之助、石田文次郎、栗生武夫により購入された図書、そして、ゼッケル、チーテルマン、ミュンスターベルク文庫の図書であった。表7に「その他」としたものは、残念ながら出所が不明である。もちろん、売却されたすべての図書がこれらの文書により網羅されているとは言い切れないが、ゼッケル文庫からは合計で75点の、またチーテルマン文庫からは288点もの図書が売却されている。これまで見たように、法文学部の初代教授たちが多大な労力と喜びをもって入手したはずの文庫から、これほどの数の図書が売却されていたことには驚きを禁じ得ない。

各文書には、売却される図書のタイトルの一部と評価額、そして「買い受け人」等が記載されている。評価額にかんしてはまだ集計にいたっていないが、たとえば、1926年11月19日付の文書では、ゼッケル文庫のなかの「不要図書」として、ベルンハルト・ヴィントシャイトの『パンデクテン法学概説』第9版、全3巻（Bernhard Windscheid, Lehrbuch des Pandektenrechts, 9. Auflage, 3 Vols, 1906）が「50円」とされている。適正価格であるかどうかという意味で、これを現在の水準で5万円程度とするか、あるいは25万円程度とするかの判断は容易でないが、あくまで仮定として、1冊あたり20円程度とすれば、1点＝1冊として全数の1,695点を売り払った場合には総額で約3万4千円となり、ゼッケル文庫の購入金額を優に上回る。負債償却のための有効な手段のひとつであったことは疑いを容れない。

その最大の「買い受け人」であったのは、武内義雄の回想にもあったように、京城帝国大学である。表7における1928年（昭和3）2月23

日付の374点がそれであり、京城帝国大学には当時、安倍能成（1883～1966年）が教授として赴任していた。安倍は言わずと知れた夏目漱石の弟子の一人であり、その後は旧制第一高等学校長、戦後には文部大臣を務めた人物であった。東北帝国大学法文学部の初代教授のなかでは、小宮豊隆と阿部次郎が同じく漱石の弟子であり、おそらく武内は、かれらを通じて安倍にコンタクトをとり、京城帝国大学での買い取り交渉を取りまとめたのではないだろうか<sup>37)</sup>。また、その他の買い受け人としては、東北帝国大学内外の少なくとも14名が判明している。これらの買い受け人の分析からは、当時の人的交流とその後の蔵書の行方が推定されることになるだろうが、本稿のテーマに収まりきらないとおもわれるので、それについては稿を改めたい。

表7：重複本売却原議から析出される売却図書数

文書日付		対象および点数								合計
		児島 扱い	ゼッ ケル	チー テル マン	中川 扱い	石田 扱い	栗生 扱い	ミュン スター ベルク	その 他	
1926年（大正15）	7月10日	1								1
	7月16日		66	99	153	4	2			324
	7月20日		6	5	3		2			16
	11月19日		2	13			5			20
1927年（昭和2）	4月18日								116	116
	6月17日								1	1
	7月20日								121	121
1928年（昭和3）	1月18日								1	1
	2月4日							11		11
	2月23日			171	95		55		53	374
	12月6日		1							1
1929年（昭和4）	5月7日								10	10
	12月20日								1	1
1930年（昭和5）	2月14日								1	1
1931年（昭和6）	7月18日								4	4
1932年（昭和7）	3月4日								693	693
小計		1	75	288	251	4	64	11	1,001	1,695



さて、これで武内の証言の一部は裏づけられたことになる。負債の償却という大きな課題は、まず徹底的に複本を洗いだすという意味での蔵書の整理につながったといえる。ただし、1926年にはゼッケルの旧蔵書などはまだ日本に到着していなかったから、その照合は、先に届けられていた目録のリスト上でおこなわれたはずである。また、ヴント文庫に複本売却の形跡が認められないのは、遺文庫のなかではもっとも早く東北帝国大学に到着したために、おそらくこれが複本の照合のための基準となったからではないだろうか。つまり、すでにヴント文庫に所蔵するものが他の文庫にも含まれていた場合に、後者のほうが売却の対象となったのだろう。

さらに、蔵書整理のこのような思考法は、特殊文庫の一般蔵書への解消、すなわち「第二特殊文庫」という発想を生みだすことになったとも考えられる。なぜかといえば、複本の調査は、これから到着する図書に対してと同様、既存の一般蔵書に対してもおこなわれたはずだからである。複本は、それらの一般蔵書のなかに、多巻構成や定期刊行物などにおいて欠落した部分（欠本）が発見されたとすれば、その部分を補完するために利用された可能性もある。当時は、これらの特殊文庫の規模にくらべれば、一般蔵書の規模はより小さなものであったこともまた明白であり、それらの拡充も同時に、附属図書館の課題として認識されていただろう。

ただし、それだけでは、一つの文庫のすべてを一般蔵書のなかに混排する理由になるとは考えにくい。もうひとつの要因としては、表8に示めたように、第一特殊文庫とされたヴント、チーテルマン、ゼッケル、シュタインの4文庫に比して、その他の3文庫、シュマルソー、ミュンスターベルク、ヴォルチェンドルフはより規模が小さく、購入にあたって齋藤報恩会からの「補助」を受けることがなかった、ということも挙げられるだろう。この「補助」の金額がじっさいの購入額をしめすものでなかったことはすでに見たとおりだが、同会からの受贈という形式をとった4つの特殊文庫は、これを目に見えるかたちで残さねばならなかったのは当然である。

以上のように、負債の償却が、附属図書館における全蔵書の徹底的な再構成という思考をうながしたとすれば、令名ある個人の旧蔵書とはいえ、それをすべて保存するような方策は捨て去り、その名誉だけを顕彰

しながら同時に一般蔵書の拡充を図ることは、最善の方法ではなかったかもしれないが、現実的で合理的な方法であったといえる。たとえば、そのような第二特殊文庫のひとつとなったミュンスターベルク文庫は、そこから多数の貴重図書（当時は「別置本」と称された）が指定されている一方で、売却等により旧蔵書の約6割だけが残され、そのすべてが一般蔵書のなかに混排された文庫である<sup>38)</sup>。これは、大胆な方法により集合と個別の論理を使い分け、ある意味でそれらを両立させた第二特殊文庫の特徴をよく表わしているのではないだろうか。

表8：特殊文庫への齋藤報恩会による補助または特別寄付<sup>39)</sup>

特殊文庫	冊数	金額
ヴント	15,840	2万5,000円
チーテルマン	8,280	1万2,000円
ゼッケル	7,380	1万2,000円
シュタイン	6,810	1万3,314円
シュマルソー	1,232	
ミュンスターベルク	808	
ヴォルチェンドルフ	540	

#### 4.3. 代金の振り替え

では、このような蔵書の売却は、はたして負債の償却にどれほどの効果があったのだろうか。売却益を上述のように3万4千円と仮定して、これを表8の齋藤報恩会による補助の総額約6万2千円とあわせても、約9万6千円にすぎず、負債額の半分にも満たない。この難問を解明する鍵となるとおもわれるのが、つぎの事実である。

1932年（昭和7）の年末から翌年の3月にかけて、あるスキャンダラスな事件が世間を賑わせた。いわゆる東北帝国大学疑獄事件である。あらかじめ断っておきたいが、この事件は同大学の他部局に端を発したものであり、法文学部、附属図書館などの関係者で起訴にいたった者は皆無である。まさに疑獄という言葉通り、犯罪事実があいまいな事件であった。しかしこの事件報道のなかに、われわれの問題を解くためのひとつ



の手がかりが見出される。

1933 年（昭和 8）2 月 22 日付の河北新報には、「幽霊図書代廿万円」「図書の売買手続にも疑惑の目そそがる」というセンセーショナルな見出しが躍っている。附属図書館の司書官と出入りの書店の支店長が、この前日に警察に呼び出され、事情を聴取されているというのである。その記事には、それまでに判明したこととして、「図書館では丸善から仮に代価 10 円の図書を購入しながら、15 円ないし 20 円を支払いたるものごとく図書の対価を変更し、数年間に幽霊図書代約 20 数万円を支払ったという意外にも奇怪な事実を発見したので、係官はその点を極力取り調べている」とある。これはどういうことか。さらに、そのときの司書官であった田中敬の供述として、つぎのように語られていることに注目したい。

「東北帝大に法文学部を開設したさい、図書費の予算がかなり少額なるため、当時の図書館長武内博士が帝大総長その他の諒解を得て、丸善と貸借契約の上、巨額の図書代を月賦償還の方法として、新たに図書を購入するさい、実価に 5 割内外を付加して請求せしめ、その差額をもって丸善の債務（元利金）を償還し、今日に及んだもので、強いて法律的に解釈すれば帝大総長以下の背任行為となるかもしれないが、当事者が私腹を肥やすために御用商人と共謀し不当利益を得たものにあらう、また個人購入の教授連にも実害をあたえたものにあらう」（（ ）内も記事のまま）。

田中の釈明の毅然とした態度が印象的であるが、当該記事はこの後に記者の所感として、「ドル相場の変動の激しい場合の取引に疑惑の目が注がれ、その内容が複雑しているので、（中略）取り調べは余程困難であらうと見られている」などと締め括られている。

ここで述べられた為替レート的大幅な変動の事実からすれば、1922 年（大正 11）から 1924 年（大正 13）までの法文学部新設期における洋書の大量購入が、田中のいう「債務」の主因であったことは疑いを容れないだろう。

東北帝国大学附属図書館の創立からその基礎作りに尽力した司書官の田中敬は、この疑惑から逃れた後、まもなく大阪帝国大学に転出し、その後近畿大学の図書館長となったが<sup>40)</sup>、いずれにしても、この記事は負

債の償却方法がどのようにおこなわれていたかを明確に伝えているといえよう。すなわち、武内義雄のいう、「すべての予算を使い尽くしてなお20余万の負債を残した」というその負債額は、これを（少なくともその一部を）丸善が肩代わりした。そして図書館ではその肩代わり分を月賦返済する方法として新たに丸善と貸借契約を結び、同社から購入する図書を約1.5倍の価格で計算して、そこから返済分を捻出したのである。

丸善は、むろん金融機関ではないが、これを穏当に、われわれの言葉で「借り換え」といってもいいだろう。おそらく金利面を考慮してのことと推測される。田中の供述に、「図書費の予算がかなり少額なるため」とあるのは、これまで見てきたように、決して事実とはおもわれないが、ここでは相対的な問題にすぎない。潤沢な予算であったにもかかわらず、立て替え金により支払いまでの時間差のあったことが、このような不測の事態を生んだのである。また、負債のすべてをこの方法（購入図書の金額水増し）で償却しようとしたかどうかは判然としない。だが、むしろ上述のように、蔵書の売却と併行しておこなっていたと判断するのが自然であろう。そして、規模の小さな3つの文庫を第二特殊文庫として一般蔵書とともに扱おうとしたもうひとつの理由も、この経緯から推定することができるのではないだろうか。

なぜならば、これを一般蔵書とすることで、他の新規購入図書と混ぜあわせて、年度予算から順次支払いをおこなうことができるからである。「個人購入の教授連にも実害をあたえたものにらず」と明言されていることにも、それが示唆されているといえる。つまり、他の予算とは別立てにしたのである。また、証明はむずかしいが、売却図書の一部も丸善に引き取らせたとはいえられないだろうか。表7にあるように、「その他」（出所不明）の売却図書は1,001点であり、とくに1932年には、693点もの図書が売却されている。一度の売却数としてはあまりに大きい。先述のミュンスターベルク文庫の所蔵数は808冊とされているので、そのうち、売却されたという約4割は485冊と算出される。一部は京城帝国大学に譲渡されたらしいが、おそらく全部ではあるまい。推測するに、そのなかには、ミュンスターベルク文庫として整理される前に、一般蔵書に組み込まれたものもあったのではないだろうか。

要するに第二特殊文庫とは、会計上で見れば、年度予算のなかで徐々に購入する形式を装って、組み上げられてきたものであった。到着以前

にさえ、すでにその蔵書構成が具象化していた第一特殊文庫との違いはそこにあるといえる。

## 5. むすびにかえて

最後に、本稿で判明した事実をもとに、特殊文庫が成立するまでの経緯をまとめておきたい。1911年(明治44)年に創立した東北帝国大学には、当初理科大学であったにもかかわらず、その翌年に7万3千冊あまりの巨大な和漢書コレクションである狩野文庫が受け入れられた。その約10年後の1922年(大正11)に法文学部が設置された。その間に医科大学、工学部の開設があったとはいえ、附属図書館への図書の受け入れは年に数百冊程度にとどまっていた。しかし、その前年から始まる法文学部初代教授たちの欧米での在外研究、そしてとくに第一次世界大戦での敗戦国としてのドイツとその賠償金問題によるマルクの暴落およびハイパーインフレーション、他方での戦勝国である日本、大戦特需による日本円の高騰を背景として、わずか数年の間に5万冊にもおよぶ膨大な洋書の買い付けがおこなわれた。それは狩野文庫に匹敵する価値ある洋書コレクションを作りあげたい、という初代教授たちの想いの反映であったともいえるだろう。新学部設置の気概にあふれ、大学の図書費も経常費をのぞいた臨時費の約半分を占める48万円、教授一人当たりにして2万円が許された。2万円は現在の数千万円から1億円にも相当する巨額な予算である。法文学部の設置は、まさに時機を得たものであった。

欧州にて在外研究中の教授たちの尽力で、1922年から1924年(大正13)にかけて、ヴント、ゼッケル、シュタイン、チーテルマン等のドイツ人学者たちの旧蔵書が続々と買い付けられていった。ドイツ国内のインフレーションは過酷であり、そのさなかに死亡した著名な学者たちの、遺族によって蔵書は売り立てられていた。より安定した通貨である日本円に換金することで生活を守ろうとしたのであろう。第一陣のヴント旧蔵書の日本への到着は、あたかも凱旋のごとく迎えられた。当時の佐藤丑次郎法文学部長の言葉からは、ヴント博士に対する深い敬意、高水準の研究資料に対する大きな期待がうかがわれる。ここに、一括して所蔵する特殊文庫の形式が予示された。その後もミュンスターベルク、シュマルソー、ヴォルチェンドルフらの旧蔵書が買い付けられ、もちろん、その他の多くの洋書もヨーロッパ大陸のあちらこちらで日々買い付けら

れていたに違いない。ところが、1924年の初めにドイツのインフレーションは収束し、従前の為替レートに戻っていた。だから、インフレーションは、そのために有利に買い付けができたのではあるが、それは支払いを含めてのことではなかった。インフレーションの効果とは、売買における前提条件、いわば動機づけなのであった。

しかも、洋書の買い付けは、少なくともその重要な部分において、手許の金銭ではおこなわれていなかった。日本の商社の現地支店による立て替え金によるものであった。これが1926年（大正15）になって大学に請求された。その段階で、すでに予算内では処理できず、大学の負債は20数万円にのぼることが明らかになった。負債の償却は第二代図書館長の武内義雄の手に委ねられた。財団法人齋藤報恩会は、特別寄付あるいは研究費補助のかたちでこれに協力した。比較的規模の大きい文庫については齋藤報恩会に購入してもらい、大学はその寄贈を受けるという形式をとった。一括して所蔵する第一特殊文庫（現在の特殊文庫の一部）がそれである。

それでもなお、償却には遠くおよばなかった。一例としてゼッケル文庫の請求額は約2万5千円であったが、補助は1万2千円にとどまった。そこで、蔵書全体にわたっての複本の照合と、その売却が開始された。じっさいの図書が到着する前に、売却が決定されたものもあった。個人の旧蔵書を一括する特殊文庫をたて続けに形成した場合、附属図書館のその他の一般蔵書は相当に少数になってしまうことは、買い付けの傾向からあらかじめ判明していた。したがって文庫の重要な部分は一括し、それ以外は解体して分野ごとに排列するのが利用しやすく効率的であった。そして比較的規模の小さな文庫は一般蔵書として排架し、旧蔵者の名前だけを残して顕彰した。これが第二特殊文庫であった。

もし、かりに資金が潤沢なままであったら、附属図書館の蔵書の構成はいわば野放図なものになってしまっただろう。一般蔵書もその一部として考慮することで、蔵書全体の再検証と合理化が図られたのである。言い換えれば、一括するものにはそうするだけの価値があったということである。ゼッケル文庫に貼付された蔵書票からは、「汝これを解体することなかれ」というメッセージを読み取ることができるのかもしれない。公式には1926年（大正15）までに7つの特殊文庫が（一部は名目上であれ）成立し、狩野文庫とあわせて8つの特殊文庫が並立した。いずれも大学

の誇りとされ、東北大学附属図書館の特殊文庫の伝統が形成されることになる。

ただし、そのうちの3つの文庫を第二特殊文庫としたのには、さらに別の理由があったといわざるをえない。書店との新たな貸借契約である。複本の売却益によってさえ補うことのできなかった残りの負債のすべてを書店が肩代わりし、図書館は新規に購入する図書の代金にその元金と利子を上乗せして支払うことによりこれを完済したのであった。その対象は一般蔵書とされているが、そこに混排した3文庫の蔵書を含めなかったとは考えにくい。現在のわれわれの感覚からは「不明朗な」と形容されるだろうが、検束された田中敬司書官の言葉には、「自分は正しいことをした」という自負心がかがわれる。たしかに、そのような気概がなく、規則こそ絶対として予算内に止め、価値ある図書も眺めて前を通り過ぎ、あるいは値があるうちに売却してしまっていたら、いまの附属図書館には何も残ってしまい。少なくとも、機に乗じた大胆な買い付けと、是が非でもこれを守るという強い意志がなければ、一連の特殊文庫は決して生まれなかったのである。後に続く図書館長や館員たちは、このような思想を受け継ぎ、一般蔵書との共存を図りながら、現在まで続く多数の特殊文庫を構築したのであった。

表1：東北大学附属図書館本館所蔵 特殊文庫一覧

No.	文庫名	旧蔵者	冊数	購入(受入)	備考
1	狩野文庫	狩野亨吉	108,000	1912 年 (明治 45)	
2	チーテルマン文庫	Ernst Zitellmann, 1852- 1923	8,280	1924 年 (大正 13)	
3	シュマルソー文庫	August Schmarsow, 1853-1936	1,232	1925 年 (大正 14)	第二特殊文庫
4	ヴォルチェンドルフ文庫	Kurt Wolzendorff, 1882-1921	540	1925 年 (大正 14)	第二特殊文庫
5	ミュンスターベルク文庫	Oscar Münsterberg, 1865- 1920	808	1926 年 (大正 15)	第二特殊文庫
6	ヴント文庫	Wilhelm Wundt, 1832-1920	15,840	1926 年 (大正 15)	
7	ゼッケル文庫	Emil Seckel, 1864-1924	7,380	1926 年 (大正 15)	

8	シュタイン文庫	Friedrich Stein, 1859-1923	6,810	1926年 (大正15)	
9	西藏大蔵経	多田等観	6,652	1929年 (昭和4)	
10	櫛田文庫	櫛田民蔵	3,130	1935年 (昭和10)	
11	岡本文庫 (和算関係文庫へ)	岡本則録	1,653部	1936年 (昭和11)	第二特殊文庫
12	小牧文庫	小牧昌業	8,126	不明 (～昭和12)	第二特殊文庫
13	三矢文庫	三矢重松	1,297	不明 (～昭和12)	第二特殊文庫
14	小野文庫	小野隆庵	1,146	不明 (～昭和12)	第二特殊文庫
15	ホヂソン文庫	Ralph Hodgson, 1871-1962	898	不明 (～昭和12)	第二特殊文庫
16	岡田蓬齋並男文郁旧 蔵書	岡田蓬齋	437	1938年 (昭和13)	第二特殊文庫
17	田岡嶺雲遺書	田岡嶺雲	1,968	1938年 (昭和13)	第二特殊文庫
18	石崎教授寄贈本	石崎政一郎	1,202	1939年 (昭和14)	第二特殊文庫
19	ケーベル文庫	Raphael von Koeber, 1848-1923	1,999	1942年 (昭和17)	
20	漱石文庫	夏目漱石	3,068	1943年 (昭和18)	
21	和田文庫	和田佐一郎	2,670	1945年 (昭和20)	
22	長谷田文庫	長谷田泰三	757	不明 (昭和25～)	
23	秋田家史料	旧三春藩主秋田家	4,337点	1955年 (昭和30)	
24	児島文庫	児島喜久雄	1,494	1956年 (昭和31)	
25	大類文庫	大類伸	946	1962年 (昭和37)	
26	梅原文庫	梅原末治	1,071	1964年 (昭和39)	
27	ヴュルフエル文庫	Georg Würfel, 1880-1936	1,160	1964年 (昭和39)	旧制二高

28	晩翠文庫	土井晩翠	2,624	1965 年 (昭和 40)	
29	小宮文庫	小宮豊隆	不明	不明 (昭和 41 ～)	
30	須永文庫	須永重光	6,316	1977 年 (昭和 52)	
31	和算関係文庫	林鶴一、 藤原松三郎 他	18,335	1979 年 (昭和 54)	文庫集書の合 成
32	石津文庫	石津照璽	4,773	1979 年 (昭和 54)	
33	栗野文庫	栗野健次郎	不明	不明 (昭和 54 ～)	旧制二高
34	中川文庫	中川元？	不明	不明 (昭和 54 ～)	旧制二高？
35	長倉文庫	長倉快一郎	不明	不明 (昭和 54 ～)	旧制二高
36	矢島文庫	矢島玄亮	2,030	1980 年 (昭和 55)	
37	木下文庫	木下彰	5,067	1983 年 (昭和 58)	
38	柳瀬文庫	柳瀬良幹	1,877	1985 年 (昭和 60)	
39	河野文庫	河野与一	1,108	1985 年 (昭和 60)	
40	伊東文庫	伊東信雄	4,526	1987 年 (昭和 62)	
41	中野文庫	中野正	5,873	1988 年 (昭和 63)	
42	中村文庫	中村吉治	4,297	1988 年 (昭和 64)	
43	晴山文書	晴山吉三郎家	6,530点	1990 年 (平成 2)	
44	松本文庫	松本金寿	3,174	1990 年 (平成 2)	
45	高柳文庫	高柳真三	3,818	1994 年 (平成 6)	
46	宮田文庫 (受入継続中)	宮田光雄	14,637	1997 年 (平成 9)	
47	阿部文庫	阿部次郎	5,190	1998 年 (平成 10)	



48	齋藤養之助家史料	齋藤養之助家	数十万点	2003年 (平成15)	
49	平山文庫	平山諦	1,255	2006年 (平成18)	
50	芹澤文庫 (準備中)	芹澤長介	5,500	不明 (平成18～)	
51	金谷文庫	金谷治	5,252	2008年 (平成20)	

参考：東北大学附属図書館所蔵コレクション主要特殊文庫一覧

(<http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/list.html>), 東北帝国大学附属図書館『閲覧の栞』自昭和12年至昭和13年(1937年),『東北大学五十年史』下,1960年,広島大学附属図書館『全国国立大学所蔵 貴重図書目録』昭和48年(1973年)「文庫・集書一覧」※本表はこれまで呼称されたことのある文庫および集書の一覧であり,受入年は便宜的なものである。また,一部は現在の図書館での運用とはことなる。

## 註

- 1)「東北大学附属図書館について 組織・概要・統計類」より,附属図書館本館と4分館を含めて和漢洋の図書の合計は,4,081,265冊である(雑誌,電子ジャーナルを除く)。このうち本館の蔵書数は,2,769,068冊であり,全体の約7割にあたる。<http://www.library.tohoku.ac.jp/about/statistics.html>
- 2)『大学ランキング2017年版』(アエラMOOK)朝日新聞社,2017年によれば,東京大学の蔵書数は946万冊,京都大学は686万冊とされている。
- 3)東北大学附属図書館本館においてこれまで呼称されたことのある文庫の総数。一部は現在の図書館での運用とはことなる。
- 4)正式名称は特殊文庫であるが,附属図書館ではこれを慣習的に「個人文庫」と呼称して運用している。かつて存在した「第一特殊文庫」「第二特殊文庫」の区分(東北帝国大学附属図書館『閲覧の栞』自昭和12年至昭和13年)が用いられなくなったためとおもわれる。

『東北大学五十年史』下,1960年,1730頁では,「第二特殊文庫」の説明のなかで,特殊文庫とは,「内容を分散させないで,一括して書庫の中に別置されているもの」であるとする。『図書館利用ハンドブック』(東北大学附属図書館本館,1974年)では,たんに「特殊文庫」とするのみで,とくに区分は設けていないが,「一般図書のなかに分類配架されているもの」に上記『五十年史』のいう第二特殊文庫のいくつかの名称を挙げているので,おそらくそれらはすでに特殊文庫のカテゴリーから外れかけていたのである。1973年(昭和48)に附属図書館が片平から現在の川内南キャンパスに新築移転したさいにその区分が消滅したのだらう。これにより第二特殊文庫は,蔵書形成史を辿らなければ



- ばその存在を感知できないものになった。
- 5) 小川知幸「特殊文庫はいかに作りあげられたか」, みちのく図書館情報学研究会, 於東北大学, 2017年7月9日。
  - 6) 小川知幸「中間報告 ミュンスターベルク文庫再構成の試み」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第5号, 2018年, 109-113頁。
  - 7) 前掲『東北大学五十年史』下, 1722頁。また荒井泰治の生涯については, 菅野正道「明治実業家列伝④荒井泰治」『飛翔』(仙台商工会議所広報誌月報) 2012年3月号, 19頁に詳しい。
  - 8) 前掲『閲覧の栞』36-37頁より作成。
  - 9) 木村靖二『第一次世界大戦』ちくま新書, 2014年, 20-21頁。戦争をどのように呼称するかは参戦国の戦争観を表現しているという。フランスでは大戦争(le Grande Guerre)と呼び, アメリカでは当初ヨーロッパ戦争と呼んだが, 1917年に参戦して世界戦争と呼ぶようになった。日本は1914年にドイツに宣戦布告し参戦, これを欧州大戦と呼んだ。東北大学附属図書館本館には, 青島鹵獲図書が所蔵されている。研究史, 戦争目的, 戦局の推移等については, 軍事史学会編『第一次世界大戦とその影響』錦正社, 2015年, また, 知識人によるその受けとめ方については, 小川知幸「ローマの戦争と法について—1915年ベルリン大学エミール・ゼッケル講演録」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第3号, 11-27頁参照。
  - 10) 日本銀行金融研究所: 外国為替相場・参着払 (1893～1926年) より, データの一部をグラフ化。 <http://www.imes.boj.or.jp/hstat/data/ferdd/index.html>
  - 11) フリードリヒ＝ヴィルヘルム・ヘニング (柴田英樹訳) 『現代ドイツ社会経済史 工業化後のドイツ 1914 - 1992』学文社, 1999年より作成, 一部改変。
  - 12) オスカー・ミュンスターベルクは, 当時の日記において, ヴェルサイユ条約の破滅的作用をつぎのように予言していた。「1919年5月8日 今日はこの戦争のもっとも暗い日だ。ヴェルサイユ平和条約のことだ。あらゆる生きる喜びを拒絶し, 心臓を止めるものだ。勝利した敵国が, あまりに無慈悲なかたちで, 「無残なるかな, 征服されし者は (vae victis)」と布告する。なおも不可解におもわれるのは, そのような平和が実現されるだろうかということだ。ありえない。しかし, ではどうすれば? まるで破滅を免れることは不可能であるかのようだ。(中略) 光は見え, ただ暗い雲だけだ。何のための人生か。」前掲「中間報告 ミュンスターベルク文庫再構成の試み」の註記も参照のこと。
  - 13) Gustav Stolper, Deutsche Wirtschaft Seit 1870, 1964, S. 98より作成。
  - 14) 「法文学部年譜」『東北大学法文学部略史』(東北大学法文学部略史編纂委員会編), 仙台, 1953年, 51-84頁所収, また, 『東北大学五十年史』上, 190-193頁, 下, 1031-1036頁。
  - 15) 『東北大学五十年史』上, 232頁, ただし, 漢字かな表記の一部は改めた。
  - 16) 同書, 1010頁, ちなみに, 附属図書館旧館の書庫部分 (鉄筋コンクリート地上5階地下1階で現在は取り壊されている) は大正13年に竣工し, 延床面積

365坪。内装を別として建築費は11万円であった。同書、上、215、234頁、下、1678頁参照。ただし、記述箇所により書庫と本館の竣工の日付、また建築費がいずれに属するものかについての混同がみられる。

- 17) 同書、233頁、また、前掲『東北大学法文学部略史』33頁には、土居光知の回想として「学部から二万円前後の本を購入することを許可されて」という記述がある。
- 18) 永田英明ほか「企画展『学都仙台を支えた「天財」—齋藤報恩会と東北大学』』『東北大学史料館紀要』第12号、2017年、136頁参照。ここでは玄米の現在の平均価格と『国史大辞典』における当時の1石あたりの米価との比較から算出されている。
- 19) 前掲『東北大学五十年史』上、205-206、247-248頁の記述より作成。
- 20) 第一次大戦開戦時に渡欧しチューリヒに留学していた布施現之助は、戦争により疲弊するドイツの街頭を目の当たりにして、これが文明国のありさまか、と冷笑交じりの慨嘆を綴っている。1920年（大正9）8月5日消印のはがきには、「当地目下戦争中。交通機関、郵便、自働車、馬車、自転車軍用となる。大学病院さへも閉鎖。助手一人も居らず。工業会社皆休息。無体なれり。（中略）此地文明道德、宗教科学皆無意味無価値の極。虚飾人道暴露す。独逸にては大学も会社も皆閉鎖。英国露国の為目下食料攻の難境に在り。（中略）所謂歐羅巴欺偽虚栄文明の真相を眼前に見得るは愉快至極なり」などと書かれている（東北大学史料館所蔵『外国留学生関係（二）』布施現之助関係文書より翻刻）。
- 21) 一例を挙げれば、ゼッケル文庫の旧蔵書エミール・ゼッケルは、晩年に病を得てサナトリウムで療養中であつたが、急激なインフレーションのために治療費が不足するようになり、かつて学長をつとめたベルリン大学に借金を申し込んでいる。関係資料はベルリン大学の史料館に所蔵されている。ゼッケルの略歴と研究については、小川知幸「ゼッケルとその蔵書—ゼッケル文庫目録作成にあたって」『東北大学附属図書館研究年報』31・32、161-194頁参照。
- 22) 旧字等の漢字かな遣いは一部改めた。
- 23) 財団法人齋藤報恩会は東北随一の資産家であつた齋藤家第九代当主齋藤善右衛門（1854～1925年）により1923年（大正12）に設立され、戦前戦後を通じて東北・仙台の学術振興に多大な貢献をなした。年代からわかるように、ヴント文庫の手付け金を工面したのはその設立前であつた。齋藤報恩会については、『財団法人齋藤報恩会のあゆみ 財団85年・博物館75年』財団法人齋藤報恩会、2009年参照。
- 24) ヴント文庫入手の経緯については、東北大学文学部心理学教室に受け継がれてきた「大福帳」のなかの、千葉胤成自身によって書かれた「ヴント文庫物語」に詳しい。これを紹介した記事として、大橋英寿「原著・貴重図書・重要史料シリーズIX『ヴント文庫』（附属図書館所蔵）」『広報』（東北大学広報委員会）No.169、1996年、2-7頁を挙げておく。
- 25) 前掲『ゼッケルとその蔵書』161-162頁、（ ）内は筆者による補足である。

- 26) 「民法の歴史的比較的研究」との研究題目のもとで、1926年（大正15）に支出されている。前掲『財団法人齋藤報恩会のあゆみ』, 114頁。
- 27) その他にも、フランスの哲学史研究者ヴィクトル・デルボー（Victor Delbos, 1862-1916）の旧蔵書が横浜に陸揚げされていたようだが、1923年（大正12）9月の関東大地震のさいに発生した倉庫火災によって焼失し、まぼろしの文庫となった。齋藤報恩会の大正13年6月3日付文書には、「デルボー文庫ハ横浜税関在庫中震火災ノ為メ焼失シタルモ書店ニ対シテハ代金支払ノコトニ決定ス」とある。これに先だって、同年5月23日には評議員会において佐藤丑次郎が事情を説明している。米澤晋彦・吉葉恭行「財団法人による研究助成の実際―戦前の齋藤報恩会を事例として」『東北大学史料館紀要』第5号、2010年、20-24頁。  
 また、東北帝国大学以外にも、他の大学においてドイツまたはその周辺国から研究者の遺文庫を購入した事例としては、一橋大学のメンガー文庫（1922年）、京都大学のビュッヒャー文庫（1924年）、小樽商科大学のシェル文庫（1924年）などが知られている。これらはメンガー文庫における大塚金之助の活躍を例として、当時欧州に留学中であった教授らにより購入にいたったものが多いが、ビュッヒャー文庫については、三菱合資会社社長で三菱財団第四代の男爵・岩崎小彌太が購入し、京都帝国大学に寄贈したといわれる。このように、第一次大戦直後の欧州からは多数の遺文庫がその故国を離れ我が国に到来した。
- 28) 『東北大学五十年史』下、1684頁。
- 29) その根拠は、武内義雄の「昭和4年の夏頃に至ってやっと整理がつきかけたので」という回想によるのではないかと推測される。ただし、これは後にみるように、図書の整理ではなく、負債の整理のことだろう。前掲『東北帝国大学法文学部略史』, 17頁。
- 30) 前掲『閲覧の栞』にはゼッケル文庫の紹介にあたり、「本文庫は目下整理中であるが、既に一部の整理成り、本年度から閲覧に供する筈である」と述べられている。したがって、その主要部分は遅くとも1935年（昭和10）までには排架するにいたったが、その他の部分はさらに作業が継続されていたとみるべきである。以降の註も参照。
- 31) 『ゼッケル文庫目録 第一巻 本館所蔵 特殊文庫 洋書ノ部』東北帝国大学附属図書館、昭和10年（1935）。シュタイン、チーテルマンの各文庫の目録は翌1936年（昭和11）に刊行されている。ヴントとその他の文庫にはこのような冊子体目録は残されていない。また、第一巻とされているものの、第二巻以降は存在しない。第二巻には小冊子を収録する予定であつたらしい。
- 32) ゼッケル文庫の小冊子は整理を終えて製本のために市中にあったところを1945年（昭和20）7月の仙台空襲により灰燼に帰したという。
- 33) 武内義雄「東北大学の回想」『東北大学法文学部略史』16-17頁。一部表記を改めた。
- 34) 三菱商事株式会社は1918年（大正7）に設立され、そのベルリン支店

は1924年(大正13)に開設された。「渋沢社史データベース」(<https://shashi.shibusawa.or.jp/index.php>)参照。また、カント書店はAkademische Kant-Buchhandlungを指す。当時Josef Singerなる人物が、ベルリンのCharlottenburg 4, Kantstrasse 124に事務所を構えていた。

- 35) 前掲「ゼッケルとその蔵書」, 170頁。
- 36) 上記依頼状写しの「追白(2)右文庫は直ちに荷造りの上発送いたしたきに付き荷造りに必要なる木箱その他の用意を即刻ご準備下され候」という記述をその根拠とする。
- 37) したがって、とくにチーテルマン文庫の一部は、(破棄されていなければ)現在の韓国ソウル大学に所蔵されていると推測される。
- 38) 「本文庫は彼(オスカー・ミュンスターベルク—筆者註)の蒐集にかかる図書のうち『国華』その他本学がすでに所蔵し居るもの(この部分は京城大学へ譲渡)を除いた残り全部で、旧文庫の約6割に相当する」という記述がある。前掲『閲覧の栞』, 46頁。
- 39) 『東北大学五十年史』上, 262頁より作成。
- 40) 田中敬の後半生については、森上修「初代図書館長 田中敬博士のこと」『中央図書館報 香散見草』近畿大学中央図書館, 1989年4月, 16-19頁参照。